

日本語動詞における格支配と意味

森 田 良 行

1. 格支配と文型形成

動詞は形容詞などに比し、文脈内において取り得る「格」の種類や数はるかに多い。「ダレガ イツ ドコデ ダレト 何ヲ シタ」のように「～ガ、～デ、～カラ、～マデ、～ト、～ニ、～ヘ、～ヲ」等の格、およびそれらの組み合わせさせた複数格を取って、動詞述語の複雑な文型を拡張構成していく。動詞は格を多く取ることにより、順次意味に限定を加え、主観的・抽象的な面を消去していく。格支配によって意味を具体化・個別化させているという点で、形容詞などよりは、はるかに客観性・具体性の色濃い語であると言えよう。

このことは、動詞のその文脈内における意味特徴（意味の強調される部分）は格に支配される面が大きいということの意味する。（もちろん副詞や用言の連用修飾形によっても支配されるが。）それゆえ、どのような格をどのような組み合わせや順序で受けているかが、動詞のその文脈での意味特徴をとらえる有力な手掛りとなる。さらに、格助詞だけではなく、その格に立つ体言の概念内容の問題にまで立ち入って、どのような概念内容の名詞のときはどれだけの格を取り得、それがどのような配列で文型を構成し、述語動詞を意味的に規定していくか、考えるべきである。

1例として「出ス」という動詞を考えてみよう。「出ス」は、中にあるもの、自己の側なるもの、時にはまだ現われていないものを外に移し現わすというのが中心意義であろう。それは種々な文脈の中で用いられる「出ス」の個別的意味を捨象し、抽象化した、きわめてあいまいばく然とした

ものである。この中心意義に具体性を与えるのが、まづヲ格であり、「出ス」を他動性の動詞として特徴づける。この～ヲ格に立つ目的語には「声ヲ出ス、音ヲ出ス」のような音声、「排気ガスヲ出ス、ゴミヲ出ス、ウミヲ出ス、答案ヲ出ス、手紙ヲ出ス、金ヲ出ス、芽ヲ出ス」のようなモノ、「嫁ヲ出ス、女中ヲ出ス」のようなヒト、「暇ヲ出ス、知恵ヲ出ス、スピードヲ出ス、元気ヲ出ス、新機軸ヲ出ス」のようなコトがあり、その概念内容によって「出ス」の意味はある程度規定されてくる。すなわち、オトの場合なら「発スル」の意に。モノの場合は目的語モノの概念内容・種類・性質によってそれぞれに見合った漢語「排出、排せつ、摘出、抽出、提示、提出、提供、放出、発送、発芽、露出……」等々に置きかえられる意味として規定する。ヒトの場合は「追イ出ス」の意に。コトの場合は「与エル、産ミ出ス、現ワス」等の意に規定する¹⁾。要するにヲ格で示される目的語は出される主体(被動作主)であり、その主体がオトか、モノか、ヒトか、コトかによって「出ス」の意味規定がある程度なされているわけである。

いっぽう、出す行為には、(1) 出す対象・相手・場所、(2) 出す目的・名目・結果が設定される場合も多い。(1) はふつうへ格・ニ格で示され、
事務所へ出ス／先生ニ出ス／(小説ヲ) 雑誌ニ出ス／(ゴミヲ) 道ニ
出ス

等、多くモノ主体となり、モノの位置的移動を表わす。(2) はすべてニ格で示され、ヒト主体なら

奉公ニ出ス／嫁ニ出ス／宮仕エニ出ス／女中ニ出ス

のように「……トシテ行カセル」命令的移動の意に、コト主体なら

声ニ出ス／顔色ニ出ス／口ニ出ス

と内に秘めた事柄を「現ワス」意味になる。その他、へ格・ニ格を取り得ない短文型

1) 「出ス」はしばしば「(女ニ) 手ヲ出ス／舌ヲ出ス／ボロヲ出ス／本ヲ出ス〈出版〉」のように慣用句として、出ス本来の意から離れた用い方をする。本稿ではいちおうこのような慣用的な用法は除外する。

音ヲ出ス／芽ヲ出ス／スピードヲ出ス／元氣ヲ出ス
などは、状態の変化として無から有への発生を意味する。

このようにへ格・ニ格で規定された意味は、ヲ格に立つべき目的語の性質（モノか、ヒトか、コトか）を規定し、それらが1つの文型としてニ格とヲ格との組み合わせや、それぞれの格に立ち得る体言同士の意味的結合の可否を規定していく。それが結果として述語動詞「出ス」の意味を規定するという相関関係にある。

ところで、命令的移動「嫁ニ出ス／奉公ニ出ス」等はヒト主体としてヲ格を取り、「女中ヲ嫁ニ出ス／娘ヲ奉公ニ出ス」の文型で、「出ス」の意味を「嫁入り、出仕、奉公」等に規定する。いっぽう、ニ格を取らない「女中ヲ出ス／娘ヲ出ス」文型では、「暇を出す、追い出す、追いやる」など、単にその家から外へ強制的に移す意しか示さない。ヲ格ではヒト主体として「外ニ位置を移す」という意味規定しか行ない得なかったものが、移動の目的・名目・結果をニ格で示すことにより、「～ヲ～ニ～スル」文型として、「嫁入り、奉公」等「出ス」の意味がはっきり規定されたわけである。

「～ヲ～スル」「ヲ～ニ～スル」2つの文型において、前者のヲ格と後者のニ格に立つ体言が同一語である場合、

声ヲ出ス——悲シミヲ声ニ出ス

のように、一見「声ヲ→声ニ」とヲ格からニ格への転換が行なわれたように思われるが、これは「女中ヲ嫁ニ出ス」が「嫁ニ出ス」の拡張であって、「嫁ヲ出ス」の拡張でないと同じように、「声ヲ出ス／声ニ出ス」両文型は本来無関係と言うべきである。「悲シミヲ声ニ出ス」も、発想から言えば「声ニ出ス」「何ヲ?」「悲シミヲ」であって、「声ヲ出ス+悲シミヲ」ではない。（その場合は「悲シミノ声ヲ出ス」となる。）

「英語ヲ生徒ニ教エル」も、文型「生徒ニ教エル」に「英語ヲ教エル」を代入したもので、「生徒ヲ教エル」からの拡張ではない。両者の違いは「教エル」の意味規定にも表われ、「生徒ニ教エル」は「～ヲ～ニ～スル／～ニ

～ヲ～スル」文型²⁾として、必ず「何ヲ」を前提とし、「何」の意味内容に応じて「教え込む／知識を授ける／覚えさす／知らせる」等かなり具体的な意味に規定する。いっぽうニ格をとらない「生徒ヲ教エル」文型では、教える内容は問題外となり、単に「教育する／教導する／訓育する」等の抽象的意味しか表わさないのである。

2. 格支配と意味の進化

動詞は形容詞などに比して一般に格支配度が高いとはいっても、語によってかなりの差が見られる。「若すぎる、おっとりする、苦みばしる、子供々々する、しっかりする、ありあまる、ばかげる、しゃれる、さらさらする、ありふれる」等、状態性の強い動詞は、主語を示すガ格と比較のヨリを除いては、他に格を取る可能性がほとんどない。これらは形容詞寄りの動詞で、主観性・抽象性の色濃い動詞であるとも言える。「聳える、似る、ふとる」等もきわめて限定された格しか取らない。けっきょく多くの格を取り得る語詞は、動作性を表わす動詞で、動作・作用の行なわれる対象、相手、場所、方向、時間、目的、結果、共同者、材料、手段、原因、理由……等が必要に応じて種々の格として立てられる。その立てられ方、立てられる格の数や種類、ならびにそれら格に立つ体言同士の意味関係などによって、格支配の原点たる動詞の意味を規定するのである。

動作性動詞の中では、動作の行なわれる時間・場所が点でなく線として軌跡を描く「移動動詞」が、最も多くの格を取る可能性を持つ。その格の取り方の段階に応じて、抽象的意味から具体的意味へと発展進化する。動詞は、語ごとに取り得る格の種類と数とが先天的に定まっているのではない。同じ語でも、格支配の多寡に応じて、短小文型から長大文型へと発展

2) 「英語ヲ生徒ニ教エル」は「生徒ニ英語ヲ教エル」と順序を入れ替えることが可能だが、「悲シミヲ声ニ出ス／嫁ヲ嫁ニ出ス」ではそれができない。「声ニ出ス／嫁ニ出ス」の意味的結びつきはより緊密で、直接目的・間接目的のように、目的・名目・結果を表わすニ格はヲ格に優先する。「レポートヲ先生ニ出ス／ゴミヲ道路ニ出ス」のような対象・相手・場所を表わすニ格は、ヲ格との順序の入れ替えが可能。

するにしたいが、意味面での進化が見られる。いま「進ム」を例にとって考察してみよう。

1. ……ガ進ム

仕事ガ進ム／研究ガ～／交渉ガ～／食ガ～（コト主体）

時間ガ進ム（トキ主体）

2. …ハ…ニ（ハ）進ム

彼ハ大学ニ進ム／会社へ～／建築関係ニ～／〈双六で〉次へ～（ヒト主体）

3. …ハ…ヲ…へ（ニ）進ム

彼ハ道ヲ進ム／街道ヲ西へ～／曲ガリ角ヲ左へ～／前へ～（ヒト・モノ主体）

1. はヲ、ニ、へ格を取ることができず、進む主体を～ガ格で示すだけの最小文型で、主体になり得る体言はコトかトキである。コトの場合は「進展、進^{ちよく}捗」の意に、トキの場合は「経過」の意になる。「気が進まない／進んで…する」などの慣用表現も、1. の派生的用法と考えられる。

2. はヒト主体で、人や人によって動かされる物（基石など）が主格に立ち、さらに～ニ格（または～へ格）をとって、次の上位段階を示す名詞が立つ。「進級、進学、就職」など1段階前進という地位的・位置的な転換移行の瞬間性動作を表わす。

3. はヒト・モノ主体で、人や人によって動かされる物（乗物など）、動物、それ自体移動する物（雲、川の流れ、台風など）つまり本来移動するものが主格に立ち、移動する場所や経路を～ヲ格で、移動方向を～へ格（または～ニ格）で示す。具体的な場所的移動を表わし、～ヲ格を取ることによって「進ミ行ク」という継続動作性が強調される。

さて、1. は〈事柄や状態の進展〉という概念的な意味しか持たず、移動というよりはむしろ変化である。2. は～ニ格が1つふえることによって〈前進する〉という身分的・位置的移行が表わされ、瞬間動作ではあるが、その意味はかなり具体化されてくる。3. になるとさらに～ヲ格が加わり、

具体的な移動の場所・経路が明示されることによって継続的・継時的移動行為となり、移動の起点と終点、すなわち～カラ～マデの移動範囲を文型として示すことも可能な現実的移動動作表現となる。このように格支配の累加は、それだけ動詞の意味を抽象から具体へと累進させ進化させるのである。

3. 格支配にもとづく意味分類の方法

格支配のあり方が動詞のもつ基本的意味に具体性を与え、意義素のどの面を強調するかを規定する。動詞の意味分類や語義記述は格支配のあり方を抜きにしては行なえない。格支配のあり方は、形態的にはその動詞を中心とした「文型」であり、それぞれの格に立つ体言の意味内容にまで立ち入って考えれば「文脈」ということになる。すなわち、形態的な文型と意味的な文脈とによって動詞の個別の意味は規定されている。

以上の見地から、動詞の意味分類ならびに語義記述に際して考慮しなければならぬ諸点を挙げれば、次のようになる。

1. どのような格を取ったときそのような個別の意味が強調されるか。
2. 取り得る格のうち意味規定に関与しているのはどの格か。
3. 格同士の組み合わせ上の規則はないか。もしあるとすれば、おのおのの格と動詞との緊密性の強弱についても触れねばならない。
4. ～ガ格に立つ語（動作主体）や、その他の格に立つ語の意味内容が、動詞の語義と因果関係にある場合は、その格に立ち得る語の意味範囲について記述すべきである。

次に、意味分類ならびに語義記述の一例として「行ク・来ル」をとりあげ、分析してみることにする³⁾。ここで「行ク・来ル」をとりあげたのは、両語は移動動詞のうちでも最も基本的で、かつ意味の広がり大きい動詞

3) 筆者は拙論「行く・来る」の用法（国語学75集，昭和43年12月）において、すでに「行ク，来ル」の意味分類ならびに両語の表現機構について論じたが、格支配との因果関係については、当時まだ突っこんで考察するに至っていなかった。本稿では、意味分類ならびに意味特徴が格支配と関係する部面についてのみ記述しておく。

と思われるからである。なお、「行ク」「来ル」は別語として切り離さず、まとめて論ずべき語群である⁴⁾。

「行ク・来ル」の意味分類

(1) 移動 ～ガ～カラ～へ(ニ/マデ)～ヲ行ク/来ル文型

行ク・来ルの空間的移動動作は‘何かはその現在位置から他の地点へ(に/まで)どこそこを移動する’行為であり、原理的には「ガ、カラ、へ、ニ、マデ、ヲ」とあらゆる格を取り得る。ただし、実際には文面に現われる例は少ない。文外に予想することは可能。～ガ格に立つ主体はヒト(動物を代表して)または他の力を借りずとも自身で移動可能なモノ。行ク・来ルの中では最も具体的な地理的移動であり、用例も多い。行ク・来ルの代表的意味となっている。

なお、動作・作用には「開始、続行、終了」の3段階があるが、行ク・来ルの場合は、移動の開始「そろそろ行こうか」〈出発〉、移動の終了「やっとバスが来た」〈到着〉のような瞬間動作と、「道を行く/駆まで行く」のような〈通行、歩行、前進〉などを表わす継続動作と、動作過程に応じて意味が2分される。

瞬間動作の場合はへ格・ニ格を取り、「～ガ～へ(ニ)行ク文型」を構成し、ヲ格・マデ格は取り得ない。ヲ格・マデ格を取ると「～ガ～カラ～マデ(へ、ニ)～ヲ行ク文型」として継続的動作性が強調されてしまう。

定期的移動の反復行為「1日おきに病院へ行っている」「毎日家政婦が来ている」など通勤・通学・通院などを表わす行ク・来ルは、地理的移動という点では(1)の1種と考えられる。なお「うちには朝日新聞が来ている」のように、モノ主体の(2)にも用例が見られる。

(2) 届ク ～ガ～カラ～へ行ク/来ル文型

○1人そはそはしてゐると、安産と言ふ知らせが来た。(志賀直哉「和解」)

4) 意味分析に際して、一括して行なったほうがよい一群の語がある。「行ク、来ル」の他、「ヤル、クレル、モラウ」の受給表現の語。「コ、ソ、フ、ド」の指示語、自他の対応動詞、対義語など。

○Yの家からは湯上りに使ふ1盥敷位のが2枚と其他に何故か〈タオルが〉来た。(同上)

格に自力・独力では移動できぬモノが立つ場合生ずる意味。それ自身移動能力を持たぬモノゆえ、必ずだれかによってもたらされる、だれかが携えてくるという場合。移動主体には、「手紙、通知、電報、小包」など。電話も通報手段ではあるが、モノでないため、だれかが携え運ぶモノではなく、行く・来ルは用いられない。「掛カル、アル」などを用いる。連絡は「アル／行く、来ル」両方用いられるが、本来は携え届ける場合に「行く、来ル」を用いた。

なお、(2)は地理的移動という点で、(1)の瞬間動作〈到達〉の意味範疇に含めていい。

(3) 通じる ～ハ～へ行く／来ル文型

○担架が死亡室へ行く広い庭の方へ回った。(平林たい子「施療室にて」)

○座敷の中にはまだその時分電燈が来てみなかったものか(谷崎潤一郎「蘆刈」)

格には、「鉄道、バス、道路、廊下、地下道、トンネル、電気、ガス、水道」など交通機関や交通路、敷設施設が立つ場合生ずる意味である。文型的には、方向を示すへ格(ニ格)が特徴的である。行くの場合は、行くを含む句が連体修飾格に立つ場合が多い。

(4) 通行・往来 ～ヲ行く文型

○久しぶりに見る沿線の風景には夏の光線が眩しいほど溢れ、そのなかを
行く街の人々はみんな夏服に衣がへしてゐた。(田村泰次郎「肉体の悪魔」)

○その青野の彼方に、走る電車の窓や道行く人の姿が見えました。(豊島与志雄「白蛾」)

特定方向への具体的移動動作ではない。「行き来する、歩く、通る」と置きかえ可能な、方向概念を持たない概念的移動事実の表現である。移動主体はヒト、動物、乗り物(ヒトによって動かされる機械)など。この文型は、行くのみ用いられ、来ルの例は見当たらない。行くを含む句が連体

修飾句をなし、通行通路を～ヲ格で示し、継続動作となすのが特徴的。

ヒト・モノ主体で、空間的・地理的行く来ルは (1)～(4) までである。次の (5) 以下は、トキ・コト主体で、行く・来ルも、より抽象化される。

(5) 到達 ～ガ～マデ行く／来ル文型

○私のもの〈作品→技術〉は、まだ見られる所までは行ってみないことを私はよく知っています。(武者小路実篤「或る彫刻家」)

○空想がここまで来たとき、……彼は心のなかで赤面した。(丹羽文雄「鮎」)
事柄がある状態や程度・度合いにまで達するというかなり抽象的な行く・来ルである。～ガ格には「技能、腕前、空想、順番、仕事、病気……」などコトが立ち、～マデ格には到達する状態や程度、思考展開の段階などを表わす語が来る。「1日に50ページも行けば上出来だ」のような〈進行、進捗〉もここに含めてよかろう。

(6) 到来 ～ガ来ル文型

○第二期から第三期への過程の一時的潜伏期が来る。(石川達三「深海魚」)

○彼は唯、凝っと機会の来るのを待った。(尾崎一雄「虫のいろいろ」)

主語以外の格を取らない短小文型⁵⁾。～ガ格には「夜、春、××の季節、その日、期日、適齢期、成人するとき」など、トキ(時刻・時間ではなく、時期)が立つ。このトキが、時間的に生起するコトに置き換わると、(7)の〈出現・生起〉となる。

(7) 出現・生起 ～ガ～ニ来ル文型

○今度も玉千代にはツハリと言ふやうなものが来なかった。(広津和郎「訓練された人情」)

○一服か二服のんで直ぐに軽い中毒が来てしまふかもしれない。(「深海魚」)
「ツハリ、中毒、震え、硬直、小康、哀しみ、考え」など肉体的・精神的現象が～ガ格に立つ場合が多く(コト主体)、前の(6)と同様、～ニ格は

5) 「(春が) 山に来た、里に来た、野にも来た。」のような～ニ格を立てる言い方は、現代日本語としてはむしろ特異であり、ふつうはあまり行なわれない。古典には間々例が見られるが。

あまり現われない⁶⁾。肉体・精神現象以外の現象が生起主体となる場合は、生起する場所を～ニ格で示すのがふつりである。

○母の頭には葬式の費用が第一に来るものらしい。(丹羽文雄「鮎」)

「沈黙、和解、墮落、震災」など人為現象や自然現象が～ガ格に立つ。「そんなことをすれば、当然悪い報いが結果に来る」のような、現象の生起というよりは単に因果関係を示すにすぎない言い方すらある。はなはだ概念的な理屈である。

(8) 由来・起因 ～ガ～カラ来ル文型

○其基調は尚不和から来る憎しみであると自分は思っていた。(志賀直哉「和解」)

○総ては麻布の家との関係の不徹底から来てあると思った。(同上)

○君の苦悩が、仕事の上だけでの君の立場から来てあると考へてあるやうだった。(田村泰次郎「肉体の悪魔」)

もっぱら因果関係を叙する文型。～カラ格には原因、～ガ格にはその結果生じた事実・状態が立つ。～ガ格主体は、例文のように、主として精神的・肉体的現象であるが、「株価の暴落は政変から来ている」のように、広く人為現象や社会現象、自然現象にも用いられる表現形式。「～カラ来テイル」と〈結果の現存〉を表わす補助動詞テイルをとる例が多い。「急な政変が株価の暴落に来る←株価の暴落は政変から来ている」の言い換えが可能のように、(7)〈出現・生起〉の裏返し表現でもある。

4. 格支配にもとづく基本語動詞の意味分類

動詞の格支配(つまり動詞述語の文型)とその動詞が表わす意味との関係を記述することは、語義記述の前提として必要なことである。そこで、次に主要動詞について、格支配が語義に影響を与えていると思われるものを抜き出し、列挙しておく。

6) 肉体・精神現象は、全身的・全人間的なものが多い。それゆえ、現象の生起する部分や場所を示す～ニ格を必要としない場合が多い。「ツワリが胸に来る」などとは言わない。ただし、「震えが手に来る」のような例外もある。

1. あたる
 - …ガ…ニ～ 命中 ボールが擦に～
 - …ガ～ 的中 予想が～／企画が～
 - …ハ…ニ～ 2倍に～／くじに～／調査に～
2. あらそう
 - …ト～ 闘争 敵と～／病いと～
 - …ヲ～ 競争 両校で優勝を～／先を～
3. えらぶ
 - …ニ…ヲ～ 選択 息子に嫁を～
 - …ヲ…ニ～ 選定 彼女を妻に～／隣の娘を嫁に～
4. おしえる
 - …ニ…ヲ～ 教授 人に道を～／犬に芸を～
 - …ヲ～ 教育・教導 留学生を～た経験
5. おちる
 - …ガ…ニ～ 落下, 陥る, 落第 下に～／穴に～／試験に～
 - …ガ～ 剝落, 低下 色が～／質が～
6. おもう
 - …ト～／修飾語～ 判断, 推量, 願望 正しいと～／うれしく～
 - …ヲ～ 想像, 回想, 恋慕 故郷を～
7. およぐ
 - …ヲ～／…デ～ 水泳 川を～／プールで～
 - …ヲ～ 世渡り 政界を～
8. おりる
 - …カラ…へ(ニ)～ 下降 空から地面へ～
 - …ヲ～ 下車, 下船, 退任 車を～／主役を～
 - …ガ…ニ～ 置く 霜が～／露が葉に～
 - …ガ～ 降下 命令が～／旅券が～
9. かう
 - …ヲ…デ～ 購入, 買取 本を800円で～
 - …ヲ～ 招く, 認める 恨みを～／努力を～
10. かえず
 - …ヲ…ニ～ 戻す 借金を貸主に～／白紙に～
 - …ヲ～ ひっくり返す 掌を～／茶わんの水を～
11. かける
 - …ガ～ 欠落 ガラスが～／月が～／全集の1冊が～
 - …ニ～ 乏しい 常識に～／資格に～

12. かざる
 …デ…ヲ～ 装飾 リボンで髪を～
 …ニ…ヲ～ 陳列 棚に人形を～／店先に品物を～
13. かまう
 …ヲ～ 相手にする 子供を
 …ニ～ない 無視 住民の反対に～ず…する
 …テモ～ない 許容 帰っても～ない
14. かむ
 …ガ…ヲ～ 咬合, 噛み砕く 犬が人を～／奥歯を～／ガムを～
 …ニ…ヲ～せる 挿入 車にくさびを～せる
 …ニ(デ)…ヲ～れる はさむ ドアに手を～れる
15. かよう
 …カラ…マデ～ 往来 来月からバスが～
 …ヲ…ガ～ 往来 海峡を連絡船が～
 …ニ～ 通勤, 通学 会社に～／病院に～
 …ガ～ 通じる, 通る 心が～／血の～た政治
16. かわる
 …ガ～ 変化, 変更 雲行きが～／月が～
 …ガ…ニ～ 代理, とってかわる 父に～て働く／着物が米に～
 …ヲ～ 交替 当番を～
 ～た…／～ている 風変わり ～た建物
17. きまる
 …ガ～ 決定 芥川賞が～／技が～
 …ガ…デ～ 決着 勝負が西土表で～
 …ニ～ている 当然 冬は寒いに～ている
18. きる
 …ヲ～ 着用 着物を～／ふとんを～, 身にひき受ける 人の罪を～
 …ヲ…ニ～ 感ずる 好意を恩に～
19. くだる
 …ヲ…へ(ニ)～ おりる 斜面を谷底へ～
 …へ～ 行く 九州へ～
 …ニ～ 降参 敵の軍門に～／野に～
 …ガ～ 降下, 低下, 下痢 判決が～／気温が～／腹が～
 …ヲ～ない 割る 入場者は3000名を～ない
20. くむ
 …デ…ヲ～ 汲み上げる, 汲み出す 桶で水を～

- …ニ…ヲ～ 汲み入れる 風呂に水を～
 …ヲ～ 推測 意味を～/事情を～
21. くれる
 …ガ～ 終わる 日が～/年が～
 …ニ～ 夢中 悲しみに～/思案に～
22. くわえる
 …ニ…ヲ～ たす 4に2を～/漬物に塩を～
 与える, 及ぼす 制裁を～/ポンペに圧力を～
 …ガ…ヲ～ 増す 列車がスピードを～
23. くわわる
 …ニ…ガ～ 参加, 付加 敵に援軍が～/4に2が～
 …ガ～ 増す スピードが～/寒さが～
24. けずる
 …デ…ヲ～ そぎ取る ナイフで鉛筆を～
 …ヲ～ 省く 予算を～
25. ことわる
 …ヲ～ 拒絶, 辞退 縁談を～/招待を～
 …ニ～ 了解を得る 本人に～(受身不可)
26. こまる
 …ガ～ 困苦 道に迷って～
 …ニ～ 入手難 飲料水に～/土地に～
27. さそう
 …ヲ…ニ～ 勧誘 友人を食事に～
 …ガ…ヲ～ 誘惑 町の灯が人を歓楽に～
 …ヲ～ 促す 人の涙を～/眠気を～
28. すぎる
 …ヲ～ 通過 町並を～/人生の半ばを～
 …ガ～ 経過 定刻が～/1分1分が～
 ～た… 不釣り合い, 度を越す ～た嫁
 …ニ～…はない 最高 …に～ものはない
 …ニ～ない だけである ほんの一例に～ない
29. すすむ
 …ヲ…へ(ニ)～ 移動 街道を西へ～/角を右に～
 …ニ(へ)～ 前進, 進級, 進学 次へ～/大学に～
 …ガ～ 進捗, 発展, 経過 作業が～/文化が～/時が～
 …ガ～ない その気になる 気が～ない

30. すてる
 …ヲ…ニ～ 投棄, 廃棄 ごみを川に…
 …ヲ～ あきらめる 希望を～/世を～
 …ヲ～ておく 構わぬ 泣く子を～ておく
31. せつする
 …ニ～ 直面, 相対する 海に～町/悲報に～
 …ト～ 接合 面と～
 …ヲ～ 密着 両端を～/額を～
32. ぜつする
 …ニ～ 越える 想像に～/古今東西に～
 …ヲ～ 断つ 食を～
33. たく
 …ニ…ヲ～ くべる かまどに薪を～
 …ヲ～ 燃す 火を～/石炭を～
 …デ…ヲ～ 炊飯 ガスで飯を～
34. たす
 …ニ…ヲ～ 追加 3に4を～/タンクに油を～
 …ト…ヲ～ 合計 3と4を～
 …ヲ～ すます 用を～
35. たずねる
 …ニ…ヲ～ 質問 先生に試験範囲を～
 …ヲ～ さぐる, 捜す 事情を～/母を～て三千里
36. たつ
 …ガ…ニ～ 直立 先生が前に～/とげが指に～
 …ガ～ 届く 背が～/戸が～
 …ニ～ 位置する 先頭に～/矢面に～
 …カラ…ガ～ のぼる, あがる 鍋から湯気が～/梢から鳥が～
 …ガ～ 成立, 起こる 秋風が～/義理が～
 …ヲ～/…へ～ 離れる 座を～/羽田を～/大阪へ～
37. たれる
 …ガ～ したたる, さがる 水が～/幕が～
 …ヲ～ たらす 幕を～/水を～/慈悲を～
38. つく
 …デ…ヲ～ 突き刺す, 突き当てる もりで魚を～
 …ニ…ヲ～ 当てがう 机に手を～
 …ヲ～ 達する, 突っ込む 底を～/矛盾を～

39. つくる
 …デ…ヲ～ 製作, 製造 工場で機械を～
 …ニ…ヲ～ 育成, 栽培 庭に花を～
 …ヲ～ 生み出す 笑顔を～/暇を～/列を～
40. つたわる
 …ガ～ 伝達 音が～/仏教が大陸から～
 …ニ～ 伝来 家に～宝
 …ヲ～ 経由, 伝う 屋根を/電線を～
41. つつむ
 …デ…ヲ～ くるむ, 巻く のりでご飯を～
 …ニ…ヲ～ しまい込む ふろしきに荷物を～/胸に悩みを～
 …ガ…ヲ～ 囲む, 覆う 夜霧が町を～
42. つとめる
 …ニ～ 奉仕, 勤務 サービスに～/会社に～
 …ヲ～ 任務の遂行 議長を～
 …ト～ 努力 泣くまいと～
43. つむ
 …ニ…ヲ～ 積載 車に荷物を～/机に本を～
 …ヲ～ 重ねる 練習を～/功を～
44. てつたう
 …ガ～ 原因の追加 誤解に偏見が～
 …ヲ～ 手助け 仕事を～
45. でる
 …カラ…へ(ニ)～ 外へ移動 窓から外へ～
 …へ(ニ)～ 行き着く 駅に～道
 …ヲ～ 去る 下宿を～/大学を～
 …ガ～ 現われる くぎが～/星が～/元気が～
 …ニ～ 出席, 参加 会議に～/選挙に～
 …ガ…ニ～ 公表 事件が明るみに～
 …カラ～ 産出, 発する 山から銅が～/本部から命令が～
46. とおる
 …ヲ～ 通行, 経由 道を～/門を～
 …へ～ はいり込む 客が奥へ～
 …マデ～ 届く, 達する 隅まで～声
 …ニ～ 合格 試験に～
 …ガ～ 成立 意見が～/筋が～

47. とうずる
 …ヲ～ 投げうつ 筆を～／一石を～
 …ニ…ヲ～ 投与, 投入 子会社に資本を～／罪人を獄に～
 …ニ～ 降投, 乗ずる 敵方に～／機に～
48. とむ
 …ガ～ 富裕 暮らしが～
 …ニ～ 豊富 経験に～／示唆に～
49. ともなう
 …ガ～ 付きまとう 危険が～
 …ニ～ 見合う, 従い生ずる 収入に～生活／不況に～失業
 …ヲ～ 帯びる, 連れる 危険を～／妻を～
50. とる
 …ヲ…ニ～ うつしとる 肉を皿に～／講義をノートに～
 …ヲ～ 取りたてる, 取り除く 金を～／帽子を～／痛みを～
51. ならう
 …ニ～ 手本, 従う 右に～／先例に～
 …カラ(ニ)…ヲ～ 習得 先生から数学を～
52. なる
 …ガ～ 達成, 完成 三連覇が～／新校舎が～
 …カラ～ 成立 12の章から～／酸素と水素から～
 …ニ～ 価値を帯びる 100円に～／薬に～／為に～
 …ト(ニ)～ 変化 空地が公園に～
53. ぬける
 …ガ～ 欠落 ページが～／気が～／毛が～
 …ヲ～ 通過 トンネルを～／授業を～
 …カラ～ 離れる 仲間から～
 …へ～ 抜け出る 表から裏へ～／反対側へ～
54. のぞく
 …カラ…ヲ～ 覗き見る 穴から隣家を～
 …ヲ～ 覗き込む 望遠鏡を～／古本屋を～
 …カラ…ガ～ 見える ポケットからハンカチが～
55. のぼる
 …ニ(へ)～ あがる 屋上に～／壇に～／山に～／月が空に～
 …ヲ～ 登攀 階段を～／崖を～／川を～
 …ニ～ …になる 100万円に～／噂に～
 …ガ～ 昇格, 累進 位が～

56. はいる
 …ヲ～ 通過 門を～
 …ニ(へ)～ 進入 家に～/ふろに～/大学に～
 …ガ～ 生起, 入手 ひびが～/やじが～/金が～
 …～ 納め得る 1/～びん
57. はこぶ
 …デ…ヲ～ 運搬, 運送 車で荷物を～
 …ヲ～ 進める 足を～/会議を～/良縁を～
 …ガ～ 進む 話が～
58. はじまる
 …カラ～ 生起 ささいな事から争いが～
 …ニ～ 開始 10に～/文明開化は維新に～
59. はしる
 …ガ…ヲ…へ～ 走行 汽車が西へ～/廊下を～
 …ガ～ 奔流 血が～/水が～
 …ニ～ 偏向, それる 感情に～/極端に～
60. はずむ
 …ガ～ 弾性, 激する まりが～/息が～/話が～
 …ヲ～ 多額を出す チップを～/礼を～
61. はずれる
 …ガ…カラ～ とれる ガラスがわくから～/釘が～
 …ガ…ヲ～ それる 矢が的を～
 …ガ～ 不的中 ねらいが～/当てが～
 …ニ～ 逸脱 道に～/礼儀に～/期待に～
62. はたらく
 …～ 労働, 仕事 こつこつ～
 …ガ～ 作用 浮力が～/知恵が～
 …ヲ～ 行為 不正を～/盗みを～
 …ニ～ 活用 文語で四段活用に～
63. はなす
 …ヲ…ニ～ 伝達 事情を先方に～/弟に嘘を～
 …ト～ 会話, 対話 学生達と～
 …ヲ～ 使用 英語を～/方言を～
64. はなれる
 …ヲ～ 離別 岸を～/国を～/職を～
 …カラ～ 遠隔 政界から～/駅から～/本筋から～

65. ふさがる
 …デ…ガ～ 満ちる 車で道が～／心配で胸が～
 …ガ～ 閉じる 傷口が～
66. ふさぐ
 …ガ…ヲ～ 満たす 机が場所を～／ゴミが土管を～
 …デ…ヲ～ 閉ざす 手で耳を～／人の口を～
 …ガ～ 憂鬱 心が～
67. ぶつける
 …ニ…ヲ～ 打ち当てる 塀に石を～／強敵に～
 …ヲ～ 提示 難問を～
69. ほす
 …ニ…ヲ～ 日に当てる 日にふとんを～
 …デ～ 乾かす ストープで～
 …ヲ～ 水分をとる 池を～／盥を～
69. まいる
 …へ(に)～ 参拝, 来る 神社に～／当地に～
 …で(に)～ 降参 花が霜に～／王手飛車で～／ご馳走攻めで～
 …ニ～ 宿殺 彼女に～／美人に～
70. まく
 …デ…ヲ～ 包む 桜の葉で餅を～／布で死体を～
 …ニ…ヲ～ しめる 足に包帯を～／首に手拭を～
 …ヲ～ 巻き込む, ねじる, 回す 反物を～／ねじを～／渦を～
 …ニ～ 包まれる 霧に～れる／煙に～
 …ガ～ 丸まる, まとい付く キャベツの葉が～／蔓が～
71. まねく
 …デ…ヲ～ 呼ぶ 手で人を～
 …ヲ…ニ～ 招待 友人を結婚式に～
 …ヲ…ニ(トシテ)～ 迎える 先輩を所長に～
72. みえる
 …ニ…ガ～ 眺望 空に星が～
 …ハ…ガ～ 見ること可 彼は遠くの字が～
 …ガ…ニ～ …のようだ 彼が救いの神に～
 …ト～ らしい 梅雨も明けたと～
73. みる
 …ヲ～ 視覚, 調べる, 世話 テレビを～／答案を～／勉強を～
 …ト～ 判断 形勢不利と～

74. むかえる
 …ヲ～ 待ち受ける 客を～／新入生を～／新年を～
 …ヲ…ニ～ 決めて呼ぶ 知人を家庭教師に～
 …ニ…ヲ～ 招く 娘に養子を～
75. むく
 …ヲ～ 首を曲げる 横を～／そっぽを～
 …に(へ)～ 方向をとる 南に～たへや
 傾向となる 快方に～
 …ガ～ 進む 気が～／運が～
 …に～ 適当 主婦に～内職
76. もつ
 …ニ…ヲ～ 所持, 手にとる 心に希望を～／手に石を～
 …ヲ～ 所有 別荘を～／責任を～
 …ガ～ 長持ち 体が～ない／伊勢は津で～
77. もらう
 …カラ…ニ…ヲ～ いただく 父から褒美に金を～
 …ヲ…ニ(トシテ)～ 受け入れる 新入社員を部下に～
 …カラ…ニ…ヲ～ 迎える 隣り村から息子に嫁を～
 …カラ…ヲ～ 伝染 友達から病気を～
 …ガ～ 引き受ける そのけんかは私が～
78. やすむ
 …ヲ～ 欠席, 休息 学校を～／仕事を～
 …ニ～ 就床 ベッドに～／床に～
 …デ～ 憩う 保健室で～
79. ゆう
 …ヲ…ニ～ 髪型とする 髪を高島田に～
 …ヲ～ 結ぶ 紐を～／垣根を～
80. よせる
 …ヲ…ニ(へ)～ 近寄らす, 寄稿 物置を母屋に～／原稿を雑誌社に～
 …ニ…ヲ～ 馳せる, ことよせる 月に思いを～／故郷に身を～
 …デ…ヲ～ 呼び寄せる 月玉商品で客を～
 …ガ～ 打ち寄せる 波が～／大軍が～
81. わたる
 …デ…ヲ～ 反対側へ行く 舟で川を～／橋を～
 …ヲ～ 世渡り 世の中を～
 …カラ…ニ(へ)～ 伝来 西洋から日本に～た品

…ガ…ニ～ 所有権移行 屋敷が人手に～
…ニ～ 及ぶ 500ページに～記事／多岐に～

〔追記〕 本稿の論旨の中心をなす部分は、すでに昭和46年10月17日、国語学会秋季大会（於、山形大学）の「語義の記述法——移動の動詞を例として——」と題するシンポジウム（司会、水谷静夫氏）において「動詞の語義記述法における問題点」として口頭発表したものである。シンポジウムにおける質疑の模様は「国語学」88集（昭和47年3月）において宮島達夫氏が詳細に報告しておられる。本稿はこのシンポジウムにおける発題内容を中心に、さらに資料を加えてまとめたものである。本稿の末尾に掲げた主要動詞の意味分類表は、その後の研究によるものであるが、本稿中に引用した小説の用例は、シンポジウム会場で当日筆者が配布した資料をそのまま使用したものであることをおことわりしておく。